

藻壁門院少将・弁内侍・少将内侍の死と哀傷

芹 田 渚

序

藻壁門院少将、弁内侍、少将内侍は『井蛙抄』⁽¹⁾に「信実朝臣、女三人あり。みなよき歌よみなり。」と評された女房歌人である。三人とも藤原信実の娘であるが、母は不明である。藻壁門院少将は九条家歌壇で、弁内侍と少将内侍は後嵯峨院歌壇や『弁内侍日記』に描かれた後深草内裏で活躍したことが知られているが、晩年の様子についてはいまだ不明な点が多い。⁽²⁾ 弁内侍は姉と妹が亡くなったときに哀傷歌を残しており、『井蛙抄』も姉妹の晩年について記している。また、周辺の歌人たちも三人の死や晩年に関わる歌を残している。そのような歌や記事をもとに三人の晩年と逝去について整理したい。

生年は全員不明であるが、井上宗雄氏は『明月記』⁽³⁾寛喜元年(1229)十一月三日条にある「十五歳女子」が藻壁門院少将である可能性を指摘し、建保三年(1215)の生かとしている。また、弁内侍は寛元元年(1243)の『河合社歌合』に出詠しており、このとき仮に十五歳とす

れば寛喜元年(1229)生でのちに夫となる法性寺雅平と同年、少将内侍はその少し後の生まれかと推定している。⁽⁴⁾ 藻壁門院少将と弁内侍のあいだには十四歳ほど年齢差があったと考えられる。少将内侍も弁内侍とともに『河合社歌合』に「少将弟」として出詠しており、ふたりとも歌壇への参加は初めてであるから、弁内侍と少将内侍はさほど年は離れていなかったと考えられる。

正確な没年も不明だが、『続古今集』一四四四番歌の詞書に「少将内侍人にさうしをかかせ侍りけるを、内侍みまかりて後」とあり、少将内侍は父信実よりも先に『続古今集』完成時には亡くなっていた。『新後撰集』一五五二番歌に「少将内侍身まかりける時、さまかへて」という詞書をもつ弁内侍の歌があることから、少将内侍の死を悼んで弁内侍が出家し、『続拾遺集』一三二五番歌に「少将内侍身まかりけるころ」という詞書をもつ藻壁門院少将の歌があることと、『玉葉集』二〇五二番歌や『続千載集』二〇五五番歌に弁内侍が藻壁門院少将の仏事を営む記述があることから、次に法性寺旧跡で隠棲してい

た藻壁門院少将が亡くなり、最後に仰木の里に隠棲していた弁内侍が亡くなったことが確認できる。「法性寺旧跡」、「仰木の里」はいずれも『井蛙抄』の記述による。また、姉妹の兄弟とともに内裏や歌壇で活躍した為継は文永二年（1265）に亡くなっている⁽⁵⁾。

一 少将内侍

三人のなかで最も早く没したのは玉井幸助氏や井上氏⁽⁶⁾によって一番若いと推定された少将内侍である。『統古今集』に、為継の娘である安嘉門院大式⁽⁷⁾の詠んだ歌が残されている。

『統古今集』⁽⁸⁾ 哀傷歌

少将内侍人にさうしをかかせ侍りけるを、内侍みまかりて
後、ゆかりをたづねてつかはし侍りければよめる

安喜門院大式⁽⁷⁾

あはれにぞ露のゆかりをたづねける消えにしあとに残ることのは
(一四四四)

また、玉井氏は『玉葉集』の次の歌を少将内侍の最後の足跡として挙⁽⁹⁾げている。

『玉葉集』 秋歌下

権大納言顕朝中納言になりて九月十三夜よるこび申し侍りけ
るにつかはしける
後深草院少将内侍

心ゆくほどまでのぼれ位山名たかき秋の月のしるべに（七〇〇）
このことから少将内侍の没年は顕朝が中納言になった弘長二年

(1262) 九月十三日から、『統古今集』が成立した文永二年(1265)十二月二十六日までとなる⁽¹⁰⁾。寛喜二年(1230)ころの生まれと考えると三十代の若さであった。顕朝は『弁内侍日記』⁽¹¹⁾に頭弁として登場し、宝治元年(1247)八月十六日の五九段では、前日の月が曇っていたことを内侍たちに嘆いて「身のとがのやうにうれへ歩く」様子が描かれている。弁内侍はこれに対して「澄みまざる今宵の月のいかなれば半ばよりげにさやけかるらん」と詠んでいる。

『新後撰集』一三二二番歌は、弁内侍が退職後に「昔を思ひいでて、内にさぶらひける人」に送った歌と記されている。後深草天皇退位後にも姉妹と宮中の人々とのあいだに交流があったことが『玉葉集』七〇〇番歌とこの歌の二首からうかがえる。

少将内侍が家集を編纂していたかは不明だが、前掲の『統古今集』には、姪に当たる安嘉門院大式が、少将内侍が人に書かせた草子を手元⁽¹²⁾に持っていたことが記されている。草子を書く、書かせると表現する場合、自分の作品である和歌や日記などを書かせる場合と他人の作品を写させる場合がある。また、書かれた草子を表現している「ことのは」という言葉は作品そのものを指す可能性と筆跡を指す可能性がある。この草子は少将内侍の筆跡ではないため、これは少将内侍没後に残った少将内侍の歌や日記などの作品であり、少将内侍が自詠歌などを人に書かせて草子にしていたものを、姪の安嘉門院大式が手元に置き、少将内侍がなくなった後にそのゆかりである誰かに贈ったものではないだろうか。ゆかりが誰であるかはわからない。姪よりも近い

血縁とすると、少将内侍の姉のどちらかを指しているか、記録にはないが少将内侍に子どもがいたのかもしれない⁽¹²⁾。

『新後拾遺集』には少将内侍の没後に弁内侍が出家したことを悲しむ光俊と信実の贈答がある。『弁内侍日記』の和歌には姉妹の贈答歌が多く載せられ、ふたりはともに歌の才を誇る仲の良いようすが描かれており、その片割れの早すぎる死によって弁内侍が俗世を捨てたのはいたましいことでもあり周囲には納得されることでもあったのだろう。弁内侍の生年を寛喜元年(1229)とすると、出家したのは三十四歳から三十七歳と考えられる。

『新後拾遺集』雑歌下

少将内侍身まかりて、弁内侍さまかへ侍りけるよしききて、
申しつかはしける 藤原光俊朝臣

なき人もあるがすがたのかはるをもみていかばかり涙落つらむ

(二四四八)

返し 信実朝臣

なきがなくあるがあるにもあらぬ世をみるこそ老の涙なりけれ

(二四四九)

藻壁門院少将と弁内侍はともに少将内侍と信実を見送ったことになるが、残されたふたりが哀傷歌を贈答したような形跡は残っていない。藻壁門院少将の歌は『統拾遺集』に、弁内侍の歌は『新後撰集』に、別々に残されている。

藻壁門院少将・弁内侍・少将内侍の死と哀傷(芹田)

『統拾遺集』雑歌下

少将内侍身まかりにけるころよみ侍りける歌の中に

藻壁門院少将

夢ぞとは思ひながらもさめやらぬ心ぞながきまどひなりける

(二二二五)

『新後撰集』雑歌下

少将内侍身まかりにける時、さまかへて後、いくほどもなくて信実朝臣におくれてよみ侍りける 弁内侍

くれ竹のうき一ふしに身はすてつ又いかさまに世をそむかまし

(二五五二)

『新後撰集』は少将内侍と信実の死に対する弁内侍の哀傷歌である。少将内侍の死去のときに弁内侍が詠んだ歌もまた現存しないが、これについては後述する。

二 藻壁門院少将

藻壁門院少将の没年を知る手がかりとされているのが、藻壁門院少将が詠んだ信実への哀傷歌である⁽¹⁴⁾。

『統拾遺集』雑歌下

信実朝臣身まかりてのち、春のころかの墓所にまかりたりけるに、草のあをみわたりたりけるをみてよみ侍りける

藻壁門院少将

としどしの春の草にもなくさまでかれにし人の跡を恋ひつつ

(一一八三)

なき人のうゑおき侍りける梅花のさきたりけるを

色も香もあはれはしるやなき人の心とどめしやどの梅がえ

(一一八四)

『新後拾遺集』雑歌下

父におかれて後、前裁のかれたるをみて 藻壁門院少将

おくれるて猶風さむしいつまでか霜の朽葉に立ちかくれけん

(一一五九)

信実没年は『統古今集』竟宴が行われた文永三年(1206)三月二三日

から、文永八(1271)～一二年(1275)成立の『人家集』までとされ

る。¹⁶その信実没年まで藻壁門院少将は生存していた。井上宗雄氏は親

清女(次女)が藻壁門院少将を訪ねたのは文永末(1293～4)と推

定¹⁷しており、このあたりの年代が確認できる事跡の上限となろう。建

保三年(1215)の生まれとすれば六十歳ごろに親清女の訪問を受けた

ことになる。藻壁門院少将が仕えた藻壁門院は天福元年(1233)に崩

御したが、その後も寛元元年(1239)の『河合社歌合』や寛元四年

(1246)の『春日若宮社歌合』に藻壁門院少将の名で出詠しているこ

とや、『井蛙抄』に「藻壁門院少将、老後¹⁸出家して」とあることから、在俗のまま過¹⁹ごしていたと考えられる。宝治元年(1247)の『宝治歌

合』など後嵯峨院歌壇に出詠した記録はのこされていない。

『統拾遺集』一一八三番歌は、父信実の墓所に詣でた際の歌であり、

一一八四番歌も同じ信実をしのんだ歌であろう。また、『新後拾遺集』

にも信実の死を悼む藻壁門少将の歌が残る。「猶風さむし」とあり、亡くなつてすぐの歌であれば、信実の死は草木の枯れる秋から冬にかけてのことだったのかもしれない。『統拾遺集』一一八三番歌の「かれにし」は「離れ」と「枯れ」の掛詞であろうか。亡くなった翌年の春に詠んだ歌かと考えられる。

『井蛙抄』は「少将内侍は先うせて、両人はのこれり。藻壁門院少将、老後²⁰出家して法性寺旧跡²¹すみける比、平親清女あづまよりのほりて、「さる名譽²²人なれば見參せん」とて、法性寺の宿所へたづねまかりたりけり。持佛堂に入れて、障子ごしに、「かやうに草深き栖かにわけいらせ給御心ざし、此道²³の御すきもことにおもしろく候て、老のすがたをもみえまいらせたく候へども、をのがねの心おとりせられまいらせじとて、見參し候はぬぞ」といはれける、やさしく優にこそ侍れ。いなかづとなどつねはをくりて文にて申うけ給けり。」と伝える。親清の妻であつた実材母の家集には弁内侍との贈答歌が載せられている。藻壁門院少将の歌才について、弁内侍と実材母とのあいだで会話が、それを親清女が聞いて訪ねようとしたのかもしれない。

また、藻壁門院少将の家集は現存しないが、『統拾遺集』の詞書から家集を編纂していたことが指摘¹⁹されている。

『統拾遺集』雑上

みづからの歌をかきおき侍るとて

藻壁門院少将

おもひいでて誰かしのばんはま千鳥いはね隠れのあとはかなさ

(一一一一)

三 弁内侍

藻壁門院少将

弁内侍の没年については手がかりが少ない。『井蛙抄』には、前掲の藻壁門院少将の逸話のあとに、亀山院が出家した弁内侍に歌題を送って歌を詠ませたと記している。亀山院讓位は文永十一年(1274)、崩御は嘉元三年(1305)である。『実材母集』に、弘安元年(1278)ごろの親清三回忌をいたむ弁内侍の歌があることから、井上氏は、これを弁内侍生存の下限とする⁽²⁰⁾。

少将内侍と藻壁門院少将のふたりを弁内侍が見送ったことが次の三つの歌から知られる。『新後撰集』一五〇六番歌は、少将内侍の仏事の際に弁内侍が土御門入道内大臣通成に詠むようすすめた歌、『玉葉集』二〇五一番歌は藻壁門院少将が亡くなる前に詠んだ歌に返歌をするよう弁内侍が前関白太政大臣鷹司基忠にすすめた歌、『続千載集』も同じ時と考えられ、山本入道前太政大臣洞院公守にすすめた歌である⁽²¹⁾。

『新後撰集』雑歌下

少将内侍身まかりて後、仏事のついでに、弁内侍人人にすすめてよませ侍りける歌に
土御門入道内大臣

跡をとふ人だになくはとも千鳥しらぬうらちに猶やまよはん

(二一五〇六)

『玉葉集』雑歌一

なくなりなんことちかくなりてよみ侍りける

藻壁門院少将・弁内侍・少将内侍の死と哀傷(芹田)

あるかひもいまはなぎさはま千鳥くちぬその名の跡やのこらん

(二一〇五一)

この歌の返しを、少将身まかりて後、弁内侍すすめ侍りけるに、よみてつかはしける
前関白太政大臣

その名のみかた身のうらの友千鳥跡をしのばぬ時のまもなし

(二一〇五二)

『続千載集』哀傷歌

藻壁門院少将身まかりて後、人の夢にみえて、あるかひもいまはなぎさの友千鳥くちぬその名の跡やのこらむ、とよみ侍りける歌の心を、弁内侍人人にすすめてよませ侍りけるに

山本入道前太政大臣

なき跡をしのぶむかしの友千鳥おもひやるだに音はなかれけり

(二一〇五五)

歌を詠んだ三人のうち、土御門通成は『弁内侍日記』にたびたび登場する。なかでも五八段の宝治元年(1241)八月十五夜に行われた院の御会の出席者のなかに右衛門督として名が挙がっていることは注目される。また七四段では管弦に、八七段と一一一段では蹴鞠に参加するなど多才な人物である。『続後撰集』以下の勅撰集に二八首入集した歌人であり、藤平泉氏⁽²²⁾の指摘するとおり後嵯峨院・亀山院歌壇で活躍し、『宝治歌合』や『影供歌合』には弁内侍・少将内侍とともに出演している。井上宗雄⁽²³⁾氏は早稲田大学蔵『僻案抄』奥書に通成が和歌に

熱心であったと書かれていることを指摘している。少将内侍の没年と推定したころの文永二年（1265）には大納言となっている。

鷹司基忠は宝治元年（1247）に生まれ建長八年（1256）に叙爵したため、建長四年（1252）以降散逸している現存の『弁内侍日記』には登場しないが、基忠の父兼平は七〇段で五節の櫛を下賜した優美なふるまいが賞賛されている。のちに『伏見院三十首』などに出詠し、『続拾遺集』以下の勅撰集に八五首入集した。また『井蛙抄』には基忠が歌道に執心していたことが記されており、歌人として活躍したことが知られる。文永八年（1271）には関白である。

洞院公守も建長元年（1249）に生まれ建長五年（1253）に叙爵しており、やはり『弁内侍日記』には登場しないが、父の実雄はたびたび登場して姉妹と歌の贈答をしている。公守も『続拾遺集』以下の勅撰集に二六首入集した。⁽²⁶⁾ 文永八年（1271）には権中納言になっている。

弁内侍が他の誰に歌を詠むよう勧めたかはわからないが、確認できる三人とも歌人として著名であり、また大臣の位を踏む名門の生まれであり、そのような歌人たちに弁内侍が姉と妹のために歌を依頼できたということは特筆すべきことである。藻壁門院が崩御した後、藻壁門院少将が宮仕えをしていた記録はないため、藻壁門院少将と鷹司基忠、洞院公守のあいだに交流があったのかは不明である。また、少将内侍が亡くなったであろう亀山天皇在位時に弁内侍が仕えていたという記録もなく、藻壁門院少将が亡くなったときには弁内侍はすでに出家し、宮中を退いている。そのような中で弁内侍はなぜ歌を依頼した

のだろうか。

『長綱集』三六八番歌は、やはり亡くなった人物の歌に返した歌であることを田淵旬美子氏が指摘している。⁽²⁸⁾

『長綱集』

よかはの真予上人、如法経すすめ侍りける時、故入道大納言
家申しつかはされける

かねてだに思へばゆめぞさめぬべき君がしるべのあか月のそら

（三六七）

薨去ののち、上人この歌のかへしを人人にすすむとて、ある
人の申ししかば

契りおくあか月ふかきかねごとを思ひあはせてゆめやさむらん

（三六八）

このついでに、披書遇故人と云ふ題をそへたりしに
しきしまの道ふみわけしあととめて又面景やたちかへるらん

（三六九）

三六七番歌が為家詠、三六八番歌は真予上人が為家への返歌を詠むよう人々に促したことを伝え聞いた長綱が詠んだ歌であり、三六九番歌は三六八番歌に添えられた歌である。為家詠が往生を願う歌であるため、返歌である三六八番歌も往生を祈る歌である。添えられた三六九番は為家詠への返歌ではなく為家の歌道の業績を称揚し、面影を偲ぶ。この例では亡くなったのは歌壇の重鎮たる為家である。他にも、

『統千載集』二〇八〇番歌の、宇都宮経綱が亡くなった妻のために蓮生法師にすすめた「あはれ猶とまるいのちもあるものをかはるならひのなどなかるらん」、『統後拾遺集』二二四三番歌の、為藤が為子の死を悼んで為理にすすめた「なき跡のかたみとまでや契りけんおも影のこす秋の夜の月」、『他阿上人集』一二三三番歌の、ある死者のために歌道の師である為相にすすめられて詠んだ「唯念仏申すばかりにをさまりぬ弥陀の誓はあまたあれども」、『隣女集』二一四八番歌の、亡くなった政村のために時村にすすめられて詠んだ「露はらふ袖かとぞ見る秋風にみだれてなびく庭のしら菊」など、人に勧められて死者のために歌を詠む例や死者の歌に歌を返す例は他にも見られる。また、『拾遺愚草』二九四四番歌の「亡父十三年の忌日に、遺言に侍しかは、うたよむ人くすめて結縁経供養し侍しに、嚴王品 この道をしるへとたのむあとしあらはまよひしやみもけふは、るけよ」、『統古今集』一四二六番歌で忠定が詠んだ「定家卿十三年に、前大納言為家、一品経歌とて人人にすすめ侍りけるついでに、秋懐旧といふことをむかしわがづらねしそではくちはててなみだにのこる秋のよの月」、『新千載集』二二六五番歌で実氏が詠んだ「前中納言定家十三年の法事に一品経すすめ侍りける次に、秋懐旧といふことをよみてつかはしける 後忍ぶ時さへ秋の夕ぐれをいかにとどめしかたみなるらん」、などのように仏事のおりに哀傷歌を勧める例も多く見られる。

哀傷の歌には、往生を願う、死を惜しむ、死者を記憶すると誓う、遺族をなくさめるといったさまざまな詠み方がある。『新後撰集』の

通成の歌「跡をとふ人だになくはとも千鳥しらぬうらちに猶やまよはん」は、弁内侍が少将内侍の「跡をとふ人」であることを詠んでいる。『玉葉集』二〇五二番歌と『統千載集』二〇五五番歌には「跡をしのばぬ時のまもなし」「なき跡をしのぶ」とあり、往生を願う以上に藻壁門院少将を「忘れないこと」に重点が置かれている。それは藻壁門院少将の歌に「名の跡やのこらん」とあるからなのだが、権門の歌人に忘れないと詠ませることによって、弁内侍は姉と妹の存在を和歌史に刻みつけようとしたのではないだろうか。そのためには家柄と歌才を備えた歌人に依頼する必要がある。三首はみごとに勅撰集への入集を果たした。少将内侍と藻壁門院少将が亡くなった時期は離れていると考えられるが、三首とも「友千鳥」の「跡」と詠まれており、また前掲の、藻壁門院少将が家集を編纂して詠んだ『統拾遺集』一一一一番歌にも「おもひいでて誰かしのばんはま千鳥」とある。

『山家集』七九九番歌「いにしへはついで宿もあるものを何をかけふのしるしにはせん」、『隆信集』一一〇番歌「これやそのむかしのあととおもふにもしのぶあはれのたえぬ宿かな」は、いずれも『金葉集』二奏本五九一番歌などにある、周防内侍が「すみわびて我さへのきのしのぶ草しのぶかたがたしげき宿かな」と自らの家に書き付けた跡で詠んだ歌である。佐藤恒雄氏は「披書知昔」という歌題を取り上げ、この題が「過去の世界に絶大な価値があると考ええる思想的前提」のもとに「既に存在する完成されたものへの志向と、それに絶対的に随順しようとする態度」によって過去の「ふみ」と向き合う姿勢から

詠まれていたことを指摘している。⁽³⁰⁾ 弁内侍は、いわば後の世まで語り継がれるような歌人としてふたりが古典化されることを願っていたのではないだろうか。

『井蛙抄』は「弁内侍は老の後あまになりて、さかもとの北にあふぎといふ所にこもりて侍りけり。亀山院きこしめして、七夕御会の時、題をつかはされければ、「七夕衣」に 秋きても露をく袖のせばければ七夕つめになにかさまし」とよみて侍けるを、「げにさこそ」とあはれがらせおはしまして、つねに御とぶらひなど侍ける」と伝えられている。⁽³¹⁾ 『尊卑分脈』法性寺雅平女に新陽明門院中納言という女性がいる。「女子 新陽明門院〔女房中納言 参議〔藤〕実永室〕 母〔藤〕信実朝臣女弁内侍」とあり、弁内侍の娘である。新陽明門院が生まれた弘長二年（1262）は弁内侍三十三歳、出家の上限となる年である。建長四年（1252）十月まで残存する『弁内侍日記』は家庭生活を描かないものの、弁内侍の出産を思わせるような記事もない。新陽明門院中納言の出生は建長四年十月末から弘長二年（1262）ごろではないだろうか。その夫実永の生年も不明だが文永三年（1286）に叙爵しており、ほぼ同年代と考えられる。

新陽明門院は『弁内侍日記』にも撰政殿としてよく登場する近衛兼経の孫娘にあたり、文永十一年（1274）に亀山院に入内した。弁内侍が仕えた後深草院と、その弟である亀山院のあいだに皇統をめぐる争いがあったのは周知の通りである。後嵯峨院に似て和歌を愛好した亀山院は新陽明門院を通じて弁内侍の歌才を知ったのだろうか。『弁内

侍日記』で後深草宮廷を賛美した弁内侍がどのような心境でこの歌を詠んだのかはわからない。もとより詠歌を辞退できる身分ではないが、亀山院は弁内侍の和歌に心を動かされその後も弁内侍と関わりを持ち続けたという。弁内侍もまた、歌壇と宮廷を退いたあとも人々に記憶され続けた。

結

少将内侍の死は、正元元年（1256）に後深草天皇が退位してからわずか数年後のことであった。題詠歌であろうか、宮中で詠んだ歌だろうか、自詠歌などを集めた草子を誰かに書かせていたことが知られる。

藻壁門院少将は天福元年（1233）にあるじの藻壁門院を喪った。その後も『河合社歌合』などの歌会で詠歌活動をつづけ、老後は親清女と消息を交わすなど歌人としての名声をたもちつづけた。

弁内侍は在職中に詠んだ自分と少将内侍の歌を『弁内侍日記』に書き残し、姉妹ふたりを失ったときには貴人に歌を詠ませてその足跡を記憶させようとした。『弁内侍日記』冒頭の和歌は『古今集』仮名序「歌のさまをもしりこと心の心をえたらむ人は大空の月を見るがごとくに古をあふぎて今をこひざらめかも」を典拠としている。⁽³³⁾ 書き残すこと、後世に伝えて記憶されることは和歌を詠む人々に共通する願いであったと考えられる。また、「重代」という言葉のあるとおり、代々続く歌人の一族であることに誇りを持つ人々もいた。そのなかで、

「三人姉妹」という形で記憶されたいと願ったことに弁内侍の特徴がある。

「信実朝臣、女三人あり。みなよき歌よみなり。」と『井蛙抄』に記されたのは三姉妹の没後百年ほどのことであるが、彼女たちは生涯にわたって「みなよき歌よみなり」と言われ、自負してきたのだろう。歌道家の出身でもない姉と妹のために、ごく近しい親族でもない貴人に歌を依頼するのは異例のことであり、それが承諾されたのも姉妹の往年の活躍が認められてのことと考えられる。その歌が勅撰集に採られたのは弁内侍没後のことだったかもしれないが、宿願はかなったと言えよう。

注(1) 『井蛙抄』は佐々木孝浩氏ほか校注『歌論歌学集成』第一〇卷(三弥井書店 一九九五)から引用した。

- (2) 玉井幸助氏『弁内侍日記新注』(大修館書店 一九五八)や、杉本邦子氏「後深草院少将内侍(勅撰集の女流歌人第四十一回)」「学苑」光葉会 二二八 一九五八・五)、玉井幸助氏「大原の三寂と三人の姉妹」(『学苑』光葉会 二二一 一九五八・八)、木藤才藏氏「辨内侍・中務内侍」(久松潜一氏編『日本女流文学史 古代中世篇』同文書院 一九六九)、森田兼吉氏「日記文学の成立と展開」(笠間書院 一九九六『日本文学研究』二五・二六・二七(梅光女学院大学)の再録)に弁内侍と少将内侍の生涯がまとめられている。
- (3) 冷泉家時雨亭文庫『明月記四』(朝日新聞社 二〇〇〇)
- (4) 井上宗雄氏『鎌倉時代歌人伝の研究』(風間書房 一九九七)
- (5) 『尊卑分脈』による。
- (6) 前掲 玉井幸助氏『弁内侍日記新注』(大修館書店 一九五八)
- (7) 注(4)に同じ。

藻壁門院少将・弁内侍・少将内侍の死と哀傷(芹田)

(8) 和歌は『新編国歌大観』から引用し表記は私に改めた。

(9) 注(6)に同じ。

(10) 玉井幸助氏は信実没年である文永二年十二月十六日以前を少将内侍没年の下限とする(注(6)に同じ)。井上宗雄氏は、信実の没年は確定できないため少将内侍の没年も明確に指定できないとする(注(4)に同じ)。「少将内侍」と勅撰集に記される女性には複数存在するが、『続古今集』における「少将内侍」「新院少将内侍」は後深草院に仕えた少将内侍であるため『続古今集』完成時を没年の下限とすることができる。

(11) 『弁内侍日記』の引用は、岩佐美代子氏校注・訳『弁内侍日記』(長崎健氏ほか校注・訳 新編日本古典文学全集四八『中世日記紀行集』小学館 一九九四(底本は内閣文庫蔵『弁内侍寛元記』)による。

(12) 『尊卑分脈』の信実女に「後深草院少将内侍」の名はない。信実女と記される「四条院少将内侍」という女性には「伯三位資光室」「源」資邦母」とあるが、井上宗雄氏は源資邦が嘉禎三年に叙爵していることから藻壁門院少将の年齢に近い娘であろうと推定している。

(13) 拙稿「女房日記としての『弁内侍日記』の和歌」(『中世文学』第六〇号 二〇一五・六)

(14) 前掲 玉井幸助氏「大原の三寂と三人の姉妹」(『学苑』光葉会 二二一 一九五八・八)

(15) 『和歌文学大事典』「藻壁門院少将」の項目は『続拾遺集』一二八五番歌を根拠としてあげているが、一二八三、一二八四番歌の誤りと考えられる。

(16) 『人家和歌集』二四九番歌に「資田法師二首 藤原信実朝臣身まかりて後、周忌の日新院弁内侍のものにつかはしける 猶もまたつきせじものをかなしさはけふにはてぬと思ひなすとも」とある。

(17) 注(4)に同じ。

(18) 『玉葉集』に藻壁門院少将が亡くなる直前に詠んだ二〇五一番歌が残っているため、正和元年(1322)には亡くなっていたと確認できるが、おそらくもっと以前に没していたと思われる。

(19) 注(14)に同じ。

(20) 注(4)に同じ。

藻壁門院少将・弁内侍・少将内侍の死と哀傷（芹田）

- (21) 『玉葉集』二〇五一番歌は「玉葉集」では藻壁門院少将が亡くなる前、『続千載集』では亡くなった後に人の夢に現れて詠んだ歌であり、三句目にも違いがあるが、おそらく同じ歌であろう。
- (22) 藤平泉氏「土御門家の歌人たち」（日本大学人文科学研究所研究紀要）二七 一九八九・三三
- (23) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 南北朝期』（明治書院 一九八七）
- (24) 『尊卑分脈』『公卿補任』による。
- (25) 注(23)に同じ。
- (26) 注(23)に同じ。
- (27) 『続現葉和歌集』六四二番歌に安嘉門院大貳の歌として「なき人のためにすすめ侍りける歌の中に、懐旧を あだにのみきえにし露のゆかりとてむかしをとふも涙なりけり」がある。安嘉門院大貳が詠んだ『続古今集』一四四四番歌「つゆのゆかり」「消えにしあと」と言葉が近く、少将内侍への哀傷である可能性が指摘できる。
- (28) 田淵句美子氏『中世初期歌人の研究』（笠間書院 二〇〇一）
- (29) 冷泉家時雨亭文庫『拾遺愚草下 拾遺愚草員外 俊成定家詠草 古筆』
- (30) 断簡（朝日新聞社 一九九五）
- (31) 佐藤恒雄氏「結題「披書知昔」をめぐる」『古代中世詩歌論考』（笠間書院 二〇一三）
- (32) この歌は『新拾遺集』一五八七番歌にも撰ばれている。雑上「老の後あふきといふ山里にこもりゐて侍りけるに、龜山院より題を給はりて歌よみてたてまつりけるに、七夕衣 秋きても露おく袖のせばければ七夕つめに何をかさまし 後深草院弁内侍 このちあはれがらせたまひてつねにとはせたまうけるとなむ」
- (33) 『尊卑分脈』雅平女には他に新陽明門院中納言の異母姉妹である龜山院中納言典侍、大宮院女房権中納言・後昭慶門院近衛、後一条院按察、龜山院堀河、大宮院女房、今出川院中納言がいる。龜山院中納言典侍は文永十年（1233）に昭慶門院を生んでいる。また大宮院権中納言・後昭慶門院近衛と呼ばれる女性は弘安六年（1223）に花山院家定を生んでいる。
- (30) 注(13)に同じ。

関連年表

建保三年 (1215)	このころ、藻壁門院少将誕生か。
寛喜元年 (1229)	このころ、弁内侍誕生か。夫となる法性寺雅平誕生。数年後に少将内侍誕生か。
天福元年 (1233)	藻壁門院崩御。
寛元四年 (1246)	後嵯峨天皇讓位。後深草天皇即位。『弁内侍日記』開始。
建長三年 (1251)	『続後撰集』編纂。
建長四年 (1252)	『弁内侍日記』以降散逸。
正元元年 (1259)	後深草天皇讓位。弁内侍・少将内侍退職か。龜山天皇即位。このころ、弁内侍の娘、新陽明門院中納言誕生か。

弘長二年 (1262)	少将内侍、顕朝に歌を贈る。(玉葉集 700) 少将内侍、文永二年までに没。弁内侍出家。(新後撰集 1552) 藻壁門院少将、少将内侍への哀傷歌を詠む。(統拾遺集 1315) 土御門通成、弁内侍の依頼で少将内侍への哀傷歌を詠む。(新後撰集 1506) 信実と光俊、少将内侍の死と弁内侍の出家について歌を交わす。(新後拾遺集 1448・1449) 安嘉門院大式、少将内侍のゆかりに草子を返す。(統古今集 1444)
文永二年 (1265)	『統古今集』編纂。 為継没。安嘉門院大式、為継への哀傷歌を詠む。(統拾遺集 1328 / 新後撰集 1544)
文永三年 (1266)	弁内侍の娘婿となる三条実永叙爵。 文永一年までに信実没。 弁内侍、少将内侍と信実への哀傷歌を詠む。(新後撰集 1552) 藻壁門院少将、信実への哀傷歌を詠む。(統拾遺集 1283・1284 / 新後拾遺集 1459) 資円法師、信実周忌の日に弁内侍に歌を贈る。(人家集 249)
文永十年 (1273)	雅平の娘の亀山院中納言典侍、昭慶門院を生む。 亀山天皇讓位。後宇多天皇即位。 弁内侍の娘が仕えた新陽明門院、亀山院に入内。 このころ、藻壁門院少将、出家して法性寺旧跡に住み、親清女の訪問を受けるか。(井蛙抄)
文永十一年 (1274)	このころ、藻壁門院少将、自撰家集を編纂か。(統拾遺集 1111) このころ、藻壁門院少将、亡くなる直前の歌を詠むか。(玉葉集 2051) このころ、鷹司基忠、弁内侍の依頼で藻壁門院少将への哀傷歌を詠むか。(玉葉集 2052) このころ、洞院公守、弁内侍の依頼で藻壁門院少将への哀傷歌を詠むか。(統千載集 2055) このころ、仰木に隠棲した弁内侍、亀山院より歌題を給わるか。(井蛙抄)
弘安元年 (1278)	このころ、弁内侍と実材母、歌を贈答するか。(実材母集 291～294)
弘安六年 (1283)	雅平の娘の大宮院権中納言、花山院家定を生む。
嘉元三年 (1305)	亀山院崩御。
正和二年 (1312)	『玉葉集』編纂。藻壁門院少将没の下限。